

# 「教室外活動」授業報告

—信州大学留学生センター研修コース第8期において—

青柳にし紀<sup>1</sup>

## 1. はじめに

信州大学留学生センター研修コース第8期（2003年前期）において、筆者が佐藤友則同センター助教授のご指導のもとに担当した「教室外活動」の授業報告を行いたい。この「教室外活動」は研修コース第5期（2001年後期）から第7期（2002年後期）まで行われた授業「プロジェクトワーク」を第8期から改称したものである。学習者が教室外で実際に使われている日本語と自発的、自主的に接することで、日本語の正確さだけでなく、日本語のなめらかさを体得することを目的とする。本報告は運営者の立場からその方法、実践、問題点の指摘、反省を記すことで、今後「教室外活動」のような、プロジェクトワークに核を置いた授業の運営方法確立のための一助を目指している。

## 2. プロジェクトワークとは

プロジェクトワークは本来、田中（1988）が述べるように「学習者が自分たちで話し合っ て計画をたて、実際に教室の外で日本語を使って（中略）作業を行い、作業の結果をもちよって一つの製作品にまとめる学習活動」である。その際、「話す」「書く」「聞く」「読む」の4技能を総合的に使って生の日本語に接するため、「形の正確さ」だけでなく「意味のやりとりのなめらかさ」を体得できることにこの活動の特徴がある、と田中（1988）はしている。学習者の自主的立案と行動を主体として、自然な形で日本語の4技能を修得していく総合的な教育活動といえよう。

プロジェクトワークのように、ある1つの目的のもとに4技能を総合させて学習していくことがこの授業の本来の姿といえるが、教育をとりまく諸事情、わけでも研修コース全体のカリキュラムやチームティーチングなどによりすっきりした形で授業を行うことにはなかなか難しいものがある。本授業でも個々の日程を見るとプロジェクトワークというまでには至らず、体験学習、ビジターセッション

---

<sup>1</sup> 信州大学留学生センター非常勤講師。専門は日本語教育学。

ン、作文の段階で終わっていることもある。しかし、第8期「教室外活動」の全貌を眺めたとき、生の日本語に触れながら4技能を総合的に使い、日本語のなめらかさを体得するという最小限の目的を果たしている点では、田中が述べるプロジェクトワークと変わりはない。

### 3. 研修コースと授業の概要

信州大学留学生センター研修コースは1999年後期(10月)に始まった。A(初級)・B(中級)の2クラスから成り立つ日本語学習コースである。午前2コマ主教材の授業を行い、午後は主教材を補う補助授業を曜日により1コマないし2コマ行っている。本報告対象の第8期の研修コースも従来の方式に従い、Aクラス午前は『みんなの日本語ⅠⅡ』を主教材として「文法・会話」、午後は月曜「漢字」、火曜「発音・聴解」、水曜「漢字」、木曜「発音・聴解」、金曜「教室外活動」の各分野を学習。また、Bクラスは午前『みんなの日本語Ⅱ』『Situational Functional Japanese』の復習から始め、『トピックによる日本語総合演習 中級前期』『テーマ別 中級から学ぶ日本語』『表現文型 500』などを併用して「文法・会話」、午後は、月曜「作文」、火曜「発音・聴解」、水曜「漢字」、木曜「読解」、金曜「教室外活動」を学習した。

Aクラス、Bクラスとも金曜午後の3・4コマが本授業に該当する。以下、本授業の概要を「受講者」、「授業日程」、「教育実習生の受け入れ」の3点から述べる。

#### 3. 1 受講者

本授業はA、B両クラスが合同で行った。日本語レベルが異なった学習者を一緒に受講させることで、学習者が互いに協力し合い、より自律的な学習ができる環境を整えるためである。一方で、各学習者の日本語レベルが異なることはすなわち各学習者のニーズもまた多様であることを示し、教師にはそれらに応じた柔軟な対応が求められる、という難しい課題も残った。

受講者は以下のとおりである。

##### Aクラス(4名)

学習者 a (医学研究科放射線科専攻、中国、女性)

学習者 b (医学研究科脈管病態科専攻、中国、女性)

学習者 c (工学系研究科工学・機械システム工学専攻、ベラルーシ、男性)

学習者 d (山梨大学工学研究科自然機能開発専攻、ネパール、男性)

## Bクラス (3名)

学習者 e (人文科学研究科文化コミュニケーション学科専攻、ルーマニア、女性)

学習者 f (医学研究科小児科学専攻、中国、女性)

学習者 g (人文学部短期留学生、ドイツ、女性)

### 3. 2 授業日程

本授業は以下の日程で行った。

月/日	授業内容
4/18	買い物プロジェクト、オリエンテーション
	松本街歩き①概要説明
4/25	松本街歩き②松本駅前を散策
ゴールデンウィーク	
5/9	日本文化体験①ビデオ (茶道) 鑑賞、書道体験
	作文 (松本街歩き、ゴールデンウィーク)
5/16	日本文化体験②茶道、邦楽演奏体験
5/23	日本人と話そう①準備
5/30	日本人と話そう②日本人学生とグループ会話
6/6	日本人と話そう③フィードバック (ビデオ)、作文 (日本人と話そう)
	「蛍祭り」概要説明、計画
6/13	おしゃべりパーティー①準備 i (招待状作成)、 授業後「蛍祭り」見学
6/20	おしゃべりパーティー②準備 ii (企画、係分担、各自準備)
6/27	おしゃべりパーティー③準備 iii、6:30p.m.パーティー開始
7/4	作文 (おしゃべりパーティー、「蛍祭り」)
	インタビュープロジェクト①概要説明、準備開始
7/7~10	インタビュープロジェクト準備
7/11	インタビュープロジェクト②発表会
7/18	インタビュープロジェクト③フィードバック (ビデオ)
	暑中見舞い状作成
7/25	文集作成プロジェクト①企画、係分担、編集作業 i
夏休み	
9/5	文集作成プロジェクト②編集作業 ii
	研修旅行調査プロジェクト 研修旅行地調査

先述のとおり、この日程には総合的なプロジェクトワークというよりは、①「日

本文化を知る」「バスに乗ってみる」などの体験学習、②活動の感想を日本語でまとめる作文、③センター外から日本人を招いて話をする機会を設けるビジターセッション、など単体の活動も組み込まれている。

本授業はもともとプロジェクトワークという総合的な活動を行う授業であったのに、なぜ単体の活動が組み込まれるようになったか。その理由は主に2つある。まず、「プロジェクトワーク」を始めた当初は教室内活動を中心としたカリキュラムであったため、学習者には閉塞感を感じている様子が見受けられた。この「息抜き」として、とくに教室外の活動に重点を置く結果となったこと。もう一つは、研修コースが学習者のニーズや学習適性などを考慮して作られる性格のものであるために、授業内容を画一的に組み立てられないことである。たとえば、第8期Aクラスの場合、「作文」が他のコマに組み込めない状況にあり、それを補う時間として「教室外活動」が代用され、4技能のうち「書く」ことを強調する時間が出てきたのである。

この日程の特色は、通常は別々の教室で授業を受けている学習者が一緒に受講することから、学習者同士が自然に面識、交流を深めるように作られていたことである。ゆえに、日程前半の体験学習やビジターセッションが機能し、後半のプロジェクトワークでは学習者が協力し合い、自主的に活動を進められる態勢が築かれたのである。

### 3. 3 教育実習生の受け入れ

本授業では日本人教育実習生の見学、参加を認めた。信州大学人文学部日本語教育学専攻4年生3名のうち、1名はコース始めから終わりまですべての授業に参加、見学、また実際の指導に加わった。残り2名は「松本街歩き」の活動のみ、準備を含めて参加した。

学習者が教育実習生という教師とは異なる生の日本人と接触する機会を得られたこと、学習者と日本人学生とが交流する場面で教育実習生が互いの連結パイプの役目を果たしてくれたことから、教室の雰囲気もよくなり、運営者にとって非常にスムーズに授業を進めることができた。

教育実習生の立場からすれば、コース開始から終了までの「教室外活動」の流れが見られたという利点はあったものの、机から離れた活動が中心であったため、「文法・会話」といった教室内の授業方法を学ぶ機会が乏しかったり、チームティーチングの影響で実際に独りで教壇に立つ機会が少なかったりするなど、教育実習本来の体験ができなかったマイナス点がある。指導が十分に行き届かなかったのではないかと反省される。教育実習生が独創性豊かで熱心な学生たちであったゆえに、惜しまれる。

## 4. 実施報告

本授業の実施については、すでに門脇（2004）が9つの活動として整理し、発表している。本報告もその発表にしたがって行うが、主に授業で実施した内容<sup>2</sup>と学習者の様子、反省点を運営者の立場から述べたい。

### 4. 1 買い物タスク

#### 4. 1. 1 実施内容

大学構内でカタカナと漢字のことばを探し、コンピュータに入力。さらに各自のタスクとして与えられた品物を実際に購入させた。フィードバックとしては教室に集合した時点で探してきたことばをカタカナと漢字で板書し、意味などを確認した。

Aクラスのほとんどがゼロ学習者で、Bクラス学習者とのレベル差が歴然としていたため、各クラスに与えるタスクにはできるだけ難易差をつけることを考慮した。具体的にはAクラス学習者には「ボールペン」や「ボックスティッシュ」などカタカナ語で表される品物の購入を指示、Bクラス学習者には在庫がない本の注文やコンサートチケットの予約を指示した。ただし、Bクラスの学習者であっても、国籍によってはカタカナや漢字の書き取りは苦手な場合があると考えられたことから、カタカナ探しの作業は全員一緒に行わせた。これにはコンピュータの日本語入力に慣れさせる目的もあった。

#### 4. 1. 2 学習者の様子、反省点

初授業のためオリエンテーションがあり、フィードバックと合わせて教室内の活動時間が長いものになった。

Aクラスの学習者は授業全体を通して興味深げに、積極的に活動。学習者同士協力し合ってタスクを達成、コンピュータ入力も熱心に行った。「I knew some new words associated with my daily life, I can do shopping by myself. (学習者 b)」など反応もよかった。

Bクラスの中には長い説明を受ける段階で退屈そうにしている学習者もいたが、実際にタスクを行う段階ではむしろ不安げに苦勞する場面も見られた。コンピュータ入力は不慣れであった。これらの状況により反応は「It was a bit confusing and I didn't quite understand the purpose of this class. (学習者 e)」と厳しいものだった。

---

<sup>2</sup> 詳細は門脇(2004)を参照。

## 4. 2 松本街歩き

### 4. 2. 1 実施内容

大学前バス停から松本駅前バスターミナルへ行き、そこから全員同一コース(バスターミナル→市中央公民館→人形町→中町商店街・蔵シツク館→縄手通り→四柱神社)を徒歩で見学、昼食時解散とした。途中、バスターミナルと中町商店街において各自にタスクシートを配布した。内容はAクラス学習者には「信州大学へ行くバスは何番線か」「～店の食器はいくらか」など身近なタスクを与え、Bクラス学習者には「間違えて買ってしまった高速バスのチケットをキャンセル、新しく買いなおす」「商店街で売っている家具の製造方法を店の人に聞く」などAクラスに比べて難しいタスクを与えた。フィードバックとしては次の時間に作文を書かせた。

### 4. 2. 2 学習者の様子、反省点

Aクラスの教科書進度を考慮し、教師が計画したコースを学習者が教師について回るという形であったため、この段階では学習者の自主性を促すまでには至らなかった。しかし、教室外の活動であったため学習者にとって新鮮な学習になった点、特に来日して間もない学習者にとっては日常生活のフォローアップにつながった点で効果があったといえる。「街の人に道を聞いた。いい経験ができたと思います。(学習者 a)」、「It was nice, but the tasks were not very clearly chosen. (学習者 e)」という反応があった。

## 4. 3 日本文化体験

### 4. 3. 1 実施内容

導入授業として茶道に関するビデオを視聴、その後2コマに分けて書道、邦楽、茶道の3つの日本文化を体験学習した。書道では人数分の書道道具を用意、教師と教育実習生が書道道具の名称・使い方・姿勢などを簡単に説明し、各自好きな言葉を書かせた。邦楽では琴を使って教師が簡単に「さくら」をモデル演奏し、演奏道具・弾き方・姿勢を説明、実際に触れて練習させた。琴は2面のみの用意だったが、学習者が交替で練習し、数名は「さくら」を最後まで演奏できるほどに至った。さらに、茶道では学外から先生<sup>3</sup>をお招きし、茶・道具を見て、説明を受けたうえで、お点前を見ながらお茶とお菓子をいただいた。ここでは学習者数名がお茶を点てる作業を体験。フィードバックは琴と茶道、それぞれ学習者を写したビデオを見て感想を話し合った。

### 4. 3. 2 学習者の様子、反省点

---

<sup>3</sup> 矢沢直子先生。松本市在住。

これらの体験学習はほぼ全員に好評だったようだ。「教室外活動」にあまり積極的でないBクラスの学生も熱心に参加した。学習者eは学部で行われている正規の授業でも書道を勉強したいと申し出てきた。Aクラスの学生も熱心であった。学習者cは書道では何枚も気に入った言葉を書き、終了後、作品をカメラに収めるなどしていた。学習者が受け身の授業ではあるが、日本文化を知るうえで貴重な体験学習であったと思われる。

#### 4. 4 「日本人と話そう」

##### 4. 4. 1 実施内容

人文学部日本語教育学専攻の日本人学生13名の協力をいただき、本授業に参加してもらった。この時間は本来のAクラスとBクラスとに分けて実施、日本人学生にもそれぞれ分かれて参加してもらった。

準備として、Aクラスは自己紹介、学習者が住んでいた街や学習者の好きな物を紹介することとし、日本人学生にも同様の紹介話をしてもらうよう事前に依頼、それについて日本人と話をすることとした。日本人に対する聞き返しの練習、好きな物の実物があればそれを用意、また、出身地や好きな物について口頭で話ができるように作文を書いた。居合わせた教育実習生に日本人学生役をお願いしてシミュレーションも行った。

当日は、学習者1名と日本人学生2名が向き合う形で座り、日本人学生から紹介を始め、学習者は日本人学生に対する質問をして、次に役割を交替する方法を取った。25分～30分で日本人学生が席を移動していき、全員が対面するまで回った。フィードバックとしては当日のビデオを見ながら日本人の発話について確認、作文を書いてまとめさせた。

Bクラスは教師の司会でディスカッションを行った。テーマは学習者の話し合いから「日本人の大学生活」「将来の夢」に絞った。準備では討論のマナーや表現、聞き返しの練習を中心にしたほか、各自興味のあるテーマに関連する話題を本やインターネットから集め、学習者自身の意見と予測される日本人の答えとを日本語でまとめた。当日は日本人学生、学習者双方から白熱した意見が出て時間を超えての話し合いになった。フィードバックは教師と教育実習生が一緒に当日のディスカッションを録音し、学習者の発話部分を文字化して発話の間違いを指摘した。

##### 4. 4. 2 学習者の様子、反省点

現状の日常生活ではあまり接することができない、日本人学生と話をすることが得られ、両クラス学習者にとって大きな成果が得られたと思われる。

Aクラスの学習者は、この時点でまだ『みんなの日本語I』で「普通形」を勉強したばかりの段階であったが、既習の日本語を駆使してかなりの意思疎通を図

れたと思われる。生の日本語に接することで、学習した言葉がどのように活用できるか、学習者自身が知る機会であったように思う。ふだん控えめな学習者 b もかなりの喜びを表した。

B クラスはディスカッションというには至らず、雑談に近い形になってしまった点が反省すべきところである。学習者が日本人学生に聞きたい質問が多く出されたため、学習者の意向を優先した話し合いにした結果であった。教師の司会が不要領なこともあって所要時間を大幅に超えてしまったが、学習者は充実した時間を持てた様子だった。学習者 g は主教材等の授業で意欲を見せることが少ないが、テーマ設定の段階からフィードバックに至るまで常に積極的に学習、当日も「直接話すことは大事」で「日本人に対する認識が変わった」としていた。学習者 f も当日は積極的に日本人に質問していた。なお、学習者 e は学会のため欠席したが、参加できなかったことを残念がっていた。さらに日本人学生からも「楽しかった」「なかなか外国人と話す機会がないので日本語を使って分かってもらおうとした経験が持ててよかった」「相手の国、文化を本当に知らないことに気づいた」などの有意義な意見をいただけた。

フィードバックでは B クラスのディスカッションについて細かい日本語の誤りも指摘した。学習者 g はこのフィードバックがとても効果的だったと授業後に申し出てくれた。

## 4. 5 「蜚祭り」見学

### 4. 5. 1 実施内容

授業時間内には行事の下調べのみ行い、祭りへの参加は自由とした。これは祭りの開始時間が午後 6 時半と遅く、離れた場所へ交通機関を利用して行かなければならなかったため、家庭や研究室の事情により学習者の参加が見込めないのではないかと考えたことによる。

下調べは以下の要領で行ったが、「4. 4」までの活動に比べ学習者の自主性に任せる活動を増やした。①インフォメーションギャップを利用し、B クラスの学習者にのみ祭りのパンフレットを配布、A クラスの学習者に説明させた、②祭りへ行く日時の決定（都合上、教師側からの提案となった）、③A クラス学習者には一律、「4. 4」で知り合った日本人学生を電話で祭りに誘うタスク、B クラス学習者には次のように個別のタスクを与えた。学習者 e は「祭りの主催者である辰野町役場に電話して詳細を聞く」、学習者 g は「インターネットなどから祭りの情報を入手する」、学習者 f は「時刻表を見て行き帰りの電車、交通手段を調査する」、という内容である。

祭り当日は松本駅前に午後 4 時 40 分に集合、電車で辰野町まで行き、現地では自由行動を取った。引き揚げは午後 10 時ごろとなり、電車で松本まで帰ったのち



別々に帰宅した。フィードバックはとくに行わなかった。

#### **4. 5. 2 学習者の様子、反省点**

自由参加であったが、蛍を見たことがないこと、祭りに参加する経験も貴重だったことから大多数の学習者が参加に積極的な姿勢を見せた。誘いの電話をかけた時点では日本人学生の参加が得られず、学習者が落胆していたが、当日は3名の日本人学生（人文学部2名、経済学部1名）も参加してくれ、電車内などでの彼らとの交流も、学習者にとって有意義な時間となった。

### **4. 6 おしゃべりパーティー**

#### **4. 6. 1 実施内容**

パーティーの企画から準備、実施まで、基本的には学習者の自主性に任せた。教師の指示で各自が招待状を作成、教師が学習者gに実行委員長を依頼（授業時、Bクラス学習者e、fが欠席であったため）。実行委員長の司会で企画、役割を決定していき、当日の活動も概ね学習者が主体となって進められた。パーティーの進行は、①始めのことは、②自己紹介、③食べながら話す、④歌（日本語の歌、学習者dによるネパールの歌）、⑤学習者cの合気道披露、⑥ゲーム（質問ゲーム、ハンカチまわし）、⑦料理コンテスト、⑧歌（「蛍の光」を各国語で）、⑨終わりのことは、であった。

#### **4. 6. 2 学習者の様子、反省点**

パーティーの役割分担は、実行委員長に学習者gを定めたほか、司会を学習者a、余興係を学習者d、「始めのことは」を学習者e、「終わりのことは」を学習者f、会場準備を学習者cとg、買い物担当を学習者bとfがそれぞれ担当した。企画会議時に欠席した学習者eがゲームを行うことに対して不満を述べたり、学習者gとfが当日、大幅に遅刻して来たり、などBクラス学習者による問題は起きたものの、Aクラスの学習者がBクラスの学習者をフォローする形で無事終了した。

### **4. 7 インタビュープロジェクト**

#### **4. 7. 1 実施内容**

この活動はAクラスのみで行った。Bクラスはすでに同様のインタビュープロジェクトを別の授業時に行っていたためである。Bクラス学習者はこの間は休講、または通常の授業を行った。

インタビュープロジェクト発表会には沖裕子人文学部教授のご指導と、教育実習生、「4. 4」と同じ人文学部日本語教育学専攻の日本人学生の参加協力を得ることができた。

発表会の準備として通常の授業時間4日間をあて、研修コースにおける全教師が交替で指導にあたった。まず、各自トピックを決め、質問項目などを盛り込んだ調査票を作る。次に、調査票をもとに日本人へのインタビューを教室外で実際に行う。その結果をまとめ、スライドをパワーポイントにて作成。日本語の原稿で発表のシミュレーション。さらに、発表会当日の司会・挨拶の練習、プログラム作成等も行った。

発表当日は会場準備等も学習者を主体に行わせた。委員長を学習者 d、プログラム作成を学習者 c、ビデオ操作を学習者 a、プロジェクター操作を学習者 b が行った。発表テーマは、学習者 a 「女性の喫煙について」、学習者 b 「アルバイトの調査」、学習者 c 「お金の使い方」、学習者 d 「アルバイトについて」。発表会は、①始めのことば、②学習者 a～d の発表（1人 25～30分、質疑応答を含む）、③終わりのことば、④沖教授、留学生センター教師4名、出席の日本人学生からのコメント、の順で行われた。フィードバックは発表時のビデオを見ながら反省点を述べ合った。

#### **4. 7. 2 学習者の様子、反省点**

準備段階で非常に熱心に取り組んだ結果、前日までにほぼ全員がスライド、日本語原稿の作成、シミュレーションを終えた。発表当日、日本人学生の参加が多く得られたことは、学習者のモチベーションを大いに高めたようだ。④におけるコメントは学習者にとって非常に有用であったと思われる。

### **4. 8 暑中見舞い状の作成**

#### **4. 8. 1 実施内容**

日本人の夏の儀礼的行事を学習してもらうのがねらいだった。学習の流れとしては、①暑中見舞いの説明、②宛名書きの練習、③文章を作る、④留学生センター教師、「4. 4」の日本人学生へ宛てて実際にハガキを書く、という順序で暑中見舞い状を作成してみた。

#### **4. 8. 2 学習者の様子、反省点**

A、Bクラス合同で行う予定であったが、学習者 e は学会出席のため、学習者 f は研究室実験のため、学習者 g は家庭事情のため、それぞれ欠席。結果として A クラス学習者のみの授業になってしまった。出席者全員が暑中見舞いを初めて見た様子だったが、宛名の漢字を全員一緒に学習するなど内容的にはすすめやすい授業であった。欠席者には各自が暑中見舞いを作成し、投函するよう指示した。

## 4. 9 文集作成

### 4. 9. 1 実施内容

「4. 6」、「4. 7」同様、学習者主体で作業を進めることとし、冒頭に目次づくりなどの係分担と文集タイトルを決定した。文集に掲載する作文はこれまで「教室外活動」で書いてきたものとした。各自が掲載する作文を見直し、修正、そのあとコンピュータ入力した。一方で各自の分担箇所の作業も行った。

### 4. 9. 2 学習者の様子、反省点

係分担では学習者 c が率先して編集長の役を買って出たので、作業に拍車がかかり、活気もでた。その余波で、「表紙デザイン」学習者 b、「はじめに」学習者 e、「終わりに」学習者 f、「目次」学習者 d、「奥付」学習者 a、と次々に担当が決まった。ほとんど A クラスの学習者が立候補する形で決定した。この後も、A クラスの学習者は各自が協力し合い、編集長の学習者 c が進行状況をすべて把握、管理して文集作成に至った。B クラス学習者は作業をすることに消極的で、学習者 e が「(授業を早退して) 自宅で作業してもよいか」と申し出る場面も見られた。「The purpose of this activity was not clear to me. (学習者 e)」というのも理由の 1 つのようだ。なお、学習者 g は留学期間が終了したため帰国し、活動に参加しなかった。

## 5. 「教室外活動」に対する学習者の評価

4 月 18 日から 9 月 5 日までにわたる「教室外活動」授業はのべ 19 コマに及んだ。この間、「買い物」「街歩き」から「日本文化体験」「おしゃべりパーティー」、その締め括りとしての「文集作成」へと、学習者は半年間、教室外などで生の日本語の世界に触れてきた。これらの体験をとおして学習者たちが何を学び取ったか、また、今期のプロジェクトワークに対して何を考えたか、2 つのアンケートを実施して学習者の評価を探った。

アンケートはまず、研修コース終了時にコース全体に対する感想などの調査を行い、次いで、コース終了後 1 ヶ月後に「教室外活動」のみに授業方法改善のための追跡調査を行った。<sup>4</sup>前者では各授業に対し「良かった点」「悪かった点」を指摘してもらい、後者では「教室外活動で行われた各活動について」「教室外活動の方法について」「日本人学生の参加について」「今後、どのような活動が必要か」を答えてもらった。

---

<sup>4</sup> 学習者 g は 2 つのアンケート実施時に既に帰国していたため、回答が得られなかった。また、追跡アンケートについては学習者 f の回答が得られなかった。

## 5. 1 研修コース終了時アンケート

A クラス学習者の回答は全体的に好評であった。「内容が豊富だった<sup>5</sup> (学習者 a)」、「give us more chance to know Japan (学習者 b)」、「It was good. (学習者 c)」。また、学習者 d は「1.different activities to adapt in Japan. 2. Information on Japanese culture. 3. Presentation practice.」としたうえで、コース中最も印象に残っていることを「Talking with Japanese students for the first time in the outclass activities. 日本人と話そう was the memorable for me.」としていた。

一方、Bクラスの学習者 e は「Some of the activities were very interesting. Some of the activities were not so interesting.」とし、学習者 f は「たくさんさんの日本文化に体験できた。よかったです。」「もっと日本人に会いたい。話したい。」と回答、それぞれ一長一短であることを答えてくれた。

## 5. 2 追跡アンケート

### 5. 2. 1 各活動に対して

5段階の選択式で回答。<sup>6</sup>

評価 活 動	A クラス					B クラス				
	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
買い物タスク	—	—	d	ab	c	—	—	e	—	—
松本街歩き	—	—	—	—	abcd	—	—	e	—	—
日本文化体験	—	—	—	d	abc	—	—	—	—	e
日本人と話そ う	—	—	—	c	abd	—	—	—	—	—
蛸祭り	—	—	—	—	cd	—	—	—	—	e
おしゃべり パーティー	—	—	—	—	abcd	—	—	—	e	—
インタビュー プロジェクト	—	—	—	bd	ac	/				
暑中見舞い作 成	—	—	—	cd	ab					
文集作成	—	—	—	—	abcd	—	—	e	—	—

※5 が最も良い評価、アルファベット小文字は学習者、をそれぞれ表す。

### 5. 2. 2 「教室外活動」の方法について

<sup>5</sup> 学習者 a の回答は中国語を訳したものである。他の学習者の回答は原文のままである。

<sup>6</sup> これらの回答の理由は本論 4「学習者の様子、反省点」の中に引用した。

Aクラスの学習者は授業方法に満足していたといえる。「この授業がとても楽しかったです。方法や企画は良かったです。(学習者 a)」、「It is very good. I'm satisfied with it. (学習者 b)」、「I think that 'Kyoushitsu-gai Katsudou' was very interesting and useful for me. (学習者 c)」、「This class is a very good way of adjusting in the environment of new place. It is really very helpful in learning language effectively. (学習者 d)」。

一方、Bクラスで唯一回答の得られた学習者 e が「I think that the activities in this class should be more appropriate to the student's age, background, level. The teaching method could also use adjustment.」と述べている。概してBクラスの学習者にとって今期の活動内容のレベルがやさしく、物足りない感を与えていたことは承知していた。あらためて、学習者一人ひとりの年齢や経歴、ニーズをしっかりと考慮に入れた、高度なカリキュラムを作り、吟味することが必要であることを痛感する。今回は学習者 e だけの意見とはいえ、この回答がAクラスに比べレベルの高いBクラス全員の声を反映しているものとして受け止めた。

### 5. 2. 3 日本人学生の参加について

A、B両クラス学習者にとって、日本人学生の参加は非常に有用であったと思われる。学習者 b「It is very good, the more, the better.」、学習者 d「It was useful.」のほか、Bクラスの学習者 e も「Sorry, I was at a conference on that occasion, but I think the idea is very good and should be done more often.」と述べているなど、授業という公式の場で一回でも多く、学生たちと交流することを望んでいることが明らかになったと思われる。

### 5. 2. 4 今後、どのような活動が必要か

学習者 b「I need more chance to speak Japanese of daily life, Japanese of my major.」、学習者 c「I want to study more conversation. Because now I have some problems in conversation with friends.」、学習者 d「Conversation practice, Speech practice without looking papers, Longer trip」などの意見があがった。今後、研究活動や日本人と接していく上でも、より実生活と結びついた日本語の学習機会を多く望んでいることがわかる。

## 6. おわりに

第8期「教室外活動」で行われた授業についてプロジェクトワークを中心に振り返ってきた。

今期は学習レベルの異なるA、B両クラス合同の授業をすすめてきたのであるが、その経験から得た特徴は次の3つに要約することができる。

第1は、学習者は両クラスともにできるだけ多く、実際に話され、使われている生の日本語に接する機会を求めている、ということである。

学習者は通常の生活では「教師である日本人」とコミュニケーションする機会しか持たない。そこに満たされぬものを感じている。教室外で多様な日本語と接し、「意味のやりとりのなめらかさ」を体得していくことがプロジェクトワークの特徴であることは「2」において述べた。学習者はその過程で、自らの日本語の4技能についてどこまで正確になめらかに機能しているのかを体感し、手応えを知りたいのである。「教室外活動」はこの要求に応えられる数少ない機会である。それゆえ、今期の授業で教育実習生や日本人学生の参加、協力を得られたことは非常に有意義であった。事実、比較的学習意欲が希薄と見えたBクラスの学習者でさえ、大勢の日本人学生の参加が得られた「日本人と話そう」の時間を再度設けてほしい、という声をあげている。また、「蛍祭り」「おしゃべりパーティー」「インタビュープロジェクト」など日本人学生が加わった他の活動についても、その方法への是非はあったものの、日本人学生の参加は非常に好評であった。今後、これらの機会は重視されてよいだろう。

第2は、A、B両クラス合同の授業には一長一短がある、ということである。

初級であるAクラス学習者には授業が進むにつれて、よりレベルの高いBクラス学習者の影響を受けて、日本語の学習態度を学び、理解を早め、各自が自律的な学習へと導かれる収穫があった。反面、より高度な学習を望むBクラス学習者には、合同授業の内容が初歩的で退屈、と考える様子が見られた。これについては、授業開始前のニーズ分析が不足していたこと、各授業活動で与えたタスクが十分に練られていなかったことに起因する、という反省がある。

第3は、4技能の1つ「書く」という作業について、「作文」として課題を与えるのではなく、あくまでプロジェクトワークの流れの中で「書く」作業をさせる工夫が必要である、ということである。

A、B両クラスに文集作成の原稿を兼ねる意味から、「街歩き」「ゴールデンウィーク」「日本人と話そう」などの課題を与えて、作文を書かせたが、学習者には意欲が湧かないように見えた。学習者が書くことに負担を感じずることは「教室外活動」本来の目的からも逸脱していることである。作文という形ではなく、その場で感想を書かせる、壁新聞を作らせる、など文を書く作業を負担に思わせない、なんらかの工夫が必要である。

「書く」作業といえば、今期のカリキュラムではAクラスに作文の授業がなかったことから、学習者には書き方の学習も必要であったようで、アンケート結果の中で学習者dは「not enough guidance on how to write good composition.」と指摘していた。

総括として、当然ではあるが、「教室外活動」の授業内容や方法については何が

有効であるか、絶えず考えていく必要がある。私見では、カリキュラムに組み込んだ体験学習、ビジターセッション、作文といった単体の学習活動を、どのように総合的な学習へと結びつけていくか問われており、その解決が緊急の課題である、と考える。

今後、信州大学留学生センターにおいて「教室外活動」が続けられ、より良い授業になることを願っている。

#### 【付記】

本授業を行うにあたり、信州大学留学生センター佐藤友則助教授ならびに留学生センター講師の方々に数々の教を頂戴いたしました。記して感謝申し上げます。

また、熱心に実習に取り組み、働いてくださった教育実習生3名の方々と「日本人と話そう」「蛍祭り」「おしゃべりパーティー」「インタビュープロジェクト」に参加、協力してくださった人文学部日本語教育学専攻の学生の皆様方にもお礼申し上げます。

最後になりますが、本授業で日本人学生の参加、協力を快く承知くださり、この報告書をまとめる機会を与えてくださった人文学部沖裕子教授に心より感謝申し上げます。

#### 【参考文献】

門脇恵理子（2004）「信州大学留学生センターにおける日本語教育実習報告」『信大日本語教育研究』信大日本語教育研究会

門脇恵理子（2004）「信州大学留学生センターにおける日本語教育実習記録」『信大日本語教育研究』信大日本語教育研究会

熊井浩子（1990）「中級レベルにおける統合的プロジェクトワークの試み」『日本語学校論集』17号 東京外国語大学日本語学校留学生日本語教育センター

倉八順子（1994）「プロジェクトワークが学習者の学習意欲及び学習者の意識・態度に及ぼす効果（1）——一般化のための探索的調査——」『日本語教育』80号

田中幸子・猪崎保子・工藤節子著（1988）『コミュニケーション重視の学習活動 I プロジェクトワーク』凡人社

日本語教育学会編（1991）『日本語教育機関におけるコース・デザイン』凡人社

#### 【参考資料】

日本語教育学会編（1982）『日本語教育辞典』大修館書店

小川芳男他編（1991）『英語教授法辞典』三省堂